
二つの炎

プラネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの炎

【Nコード】

N06780

【作者名】

プラネット

【あらすじ】

復讐を誓った逃亡者、赤石^{あかいし} 鴛^{えん}。これは彼の復讐の物語。正義と悪、そして炎の運命に包まれた一人の男のストーリー。

（前書き）

史上初の一次創作作品です。残酷表現に加えてバッドエンドオチですが是非お楽しみ下さい。

起ちこむ黒煙。眼前に映ったのは業火に焼かれる一軒の家。その光景を見つめる一般人達。その中でそれを見て口元を歪ませる人間が一人。そして鳴り響く消防車のサイレン。その人物はそそくさとその場を後にする。何故なら――。

その人間こそが火を放った。犯人というべき罪深き人間。しかし、その者にそんな実感は無いだろう。それが正義だとその者は信じているから。

正義など、所詮それは人の観点で全てが変わる。そして、同時に悲痛な叫び声がその者の背後でした。群衆に紛れ込んでいたために誰にも気づかれず、その者は姿を消した。その悲痛な叫び声はその者にとってこの上ない極上の報酬も同然だ。勿論、それはその者が自身の意志で行ったもの。その人間は静かにその場を歩み去った。自分自身への最高の報酬を片手に。

そして、それから早数年。一人の人間が静かに動き出す。片手に

は非法で手に入れた一つの拳銃を手。

この物語は、一人の男の物語だ。

目的のために、全てを破棄した人間の、世の全てに忌み嫌われる事も構わず、自身の人生全てを一つの目的のために走った男の物語である――。

「……………朝か……………」

そう呟いて一人の男が体を起こした。しかし、男の周囲にはコンクリートの残骸や黒板などが散乱している。男の寝そべっていたのは1つの机上だった。ベンチにも引けを取らないようなやけに長い机。男の全身を預ける意味では心地は中々のものだろう。

右手につけているデジタル時計を見ると既に午前九時を回っていた。男は少々慌てたように机の下に忍ばせていたリュックサックから一つのカロリーメイトを取り出して口にした。目的は昨日果たし、今日は今いる街から引き上げなければならぬ。その前に少々危険ではあるが銀行に足を運ぶ必要があった。銀行に行き、いわゆる軍資金を口座から少し引き出さねばならない。幸い、男は高校卒業後すぐに就職したおかげで少しだけ余裕があった。たまに少しアルバイトをしてお金は直接手渡しで貰っている。だが、既に用済みとなったこの街でアルバイトをする必要は無い。男はカロリーメイトを飲み込むとリュックを背に立ち上がった。

目指すは銀行だ。とは言え、そこまで大した事をするわけではないのだが。

「毎度ありがとうございました」

数十分後、男は銀行にいた。

銀行についてすぐ男は口座から金を少し引き出し、無機質な電子音を背に受けながら銀行をすぐさま後にする。幸い、銀行の監視カメラの死角で男はその作業を行ったので気づかれる事も無いだろう。男は金を手にすると、逃げるように街を後にした。移動は節約のた

めに全て徒歩を中心にしている。車移動は個人的にも色々な意味を込めても嫌だし、同時に望ましくも無かった。

男の次なる目的地は地図を見る限り山を一つ越えて着く小さな村をさらに抜けた先にある。男の胃は既にこの辛そうな生活に慣れたのかカロリーメイト一つでも音を鳴らさない。男はリュックを背負い、片手をポケットにしまいながら慎重に——ゆっくりと足を早く進める。敵はいつ、どこで現れるか分からない。そんな事を思いながら、男は一息ついて近くの石に座り込んだ。そして数分ほどじっとしてまた立ち上がると近くの落ちている木を集めだす。一晩で山を越えない——そう判断した男が取った手段は野宿だった。準備は早めにしておかないと暮れてからでは遅い、という理由で動いたのである。因みにデジタル時計は1周して既に午後4時を指している。

「ふう……………」

男は焚火を焚きながら、街で購入した食品を口の中へと放る。食品を噛む音と火の焚ける音だけが静かな山中ではBGMと化していた。そんな時だった。

「——！」

男が不意にリュックの持ち手を掴んで咄嗟に近くの草むらの茂みへ姿を隠した。そのすぐ後、別の男が先の男のいた場所に足を踏み込む。その男は七三分けしたような茶髪で髭を生やした黒スーツの男だった。黒スーツの男は少し周囲を見渡した後、腰のポケットから1つの黒い物体を取り出す。それは——。

次の瞬間、1つの大きな音が響いた。黒スーツの男の目の前の地面からは煙。そう、黒スーツの男が取り出した黒い物体——それは拳銃だった。普通ならば、警察沙汰である。しかし、黒スーツの男

は拳銃を腰のポケットに仕舞うとこう言った。

「出て来いよ、鴛^{えん}」

黒スーツの男に告げられた男——鴛^{えん}は降参したように両手を挙げて出てきた。そしてこう告げる。

「流石ですね、岸岡さん」

「ふん、お前とは付き合いが長いんだ。お前が何をするのかくらいは検討がついてる」

「なら、オレがしたい事。分かってますよね……?」

鴛は黒スーツの男——否、岸岡にそう告げる。それはまるで鴛の立場から言える最終警告のようなものだった。岸岡も黙ってそれに頷いた。やはり、鴛の考えている事はすでに看破されているらしい。しかし、岸岡はこうも続けた。

「いいか鴛。お前はまだ若い。お前みたいな若造が人生を棒に振るな。復讐^{ふしう}なんぞもつての他だ」

「……偉そうな口ですね。警視庁^{デカ}の刑事だから平然と言えるんですよ貴方は」

鴛の口調も穏やかではなかった。明らかに苛立っていた事は刑事である岸岡ならすぐに見破れる。鴛は岸岡に背を向けて言った。

「オレは貴方から受けた恩は忘れてない。だが……オレの邪魔はしないでください」

「鴛!」

岸岡が鴛の名を——鴛に止まれと言うような暗示をかけるように

告げた言葉は既に鴛の言葉には届いていなかった。鴛はその場から逃走したのである。

赤石鴛^{あかしえん} 現在指名手配の犯罪者。二十七歳男性。元サラリーマン。容疑は連続殺人放火。動機は不明。今までに殺害したと思われる人物は十を超えている。

——というのは、警視庁があくまで発した表向きの情報。そしてこの事件の全権を任されているのが岸岡龍治^{きしおかたつじ}。そう、先程鴛と話をしていた岸岡、その人だ。しかし、指名手配犯と警視庁の刑事が一触即発だったとは言え、和んだ会話をしていたのには当然の如く疑問が走るところだ。

結局——岸岡はあの後、鴛を追ったが逃げられてしまった。警察の包囲網を鴛には今まで幾度も突破されている。その事を考えると大して驚きはしなかった。しかし、下手に逃げられ続けるのも岸岡からすれば嫌なものである。岸岡は良策を練るために一旦引き返して事件の資料を調べなおしていた。

最初の事件は今から3年前。被害者は赤石鴛の家族だった。妻、子供全てが業火と共に焼き払われた。その時、鴛は他県へ出張していたため、容疑者リストからはすぐに外された。しかし、事件は次々と不可解な方向へと進んでいく。

第二の事件は鴛の高校生時代の担任が被害者となった。第三の事件は鴛のクラスメイトが一人。全て、鴛の関係者なのである。しかも、鴛は偶然なのか事件現場の近くにいた。これにより警視庁は鴛の疑いを一気に強めていく。そして最終的に赤石鴛の逮捕状を取る事に成功した。勿論、岸岡は強くそれに反対したが警視庁の上下関係には勝てず、鴛の逮捕は執行される事になる。

しかし、鴛は辛うじてその場を脱した。その瞬間、指名手配犯——赤石鴛が誕生したのである。岸岡からすれば——鴛の目的は復讐。それだけは何とんでも避けたい。復讐は復讐の連鎖を——血は血を呼び寄せる。ただそれだけだ。

「どうにかならないものかねえ……」

そう一人呟きながら、岸岡は静かに湯気の立っているブラックコーヒーに口をつける。

「^{にげ}苦え！」

警察署の中でそんな叫び声に近いモノが響いたそうなの。

翌朝。鴛は山中を何とか逃げ続け警察を撒く事に成功した。正直
お手の物である。だが、現在の警察でそんな事は容易ではない事は
明らかに明白。鴛はそういう意味ではすごい人間なのかもしれない。
さてはともかくとし、鴛の異常なペースで目的地まではもうそこ

まで距離は無い。少し歩けば、到着できそうだった。そういう意味ではペースを上げさせてくれた岸岡には感謝しなければならないだろう。しかし、息が荒れていた。

流石に不眠不休で走り続ければ域は荒れるし、同時に体中がだるい。少し休む必要がある。しかし、場所が場所で隠られるようなところなど何一つ無い。ただ平坦な道路が続いていた。結局鴛は歩く道を選ぶ。正直、体が重かった。

「岸岡のヤロー……」

怒りに近いような言葉が鴛から漏れる。仮にも走る道を選んだのは鴛自身なのだが、こういう時、他人に怒りをぶつけたくなるのが世の性だ。^{さが}そんな時。

「その人、ストップ！」

突然、背後からかかった声と共に一台のワゴン車が鴛の隣に停車してその中から一人の女性が姿を現す。

背は当然鴛よりは小さかったが、体つきは大人の女性だ。桃色のツインテールで、顔は意外と童顔。服装は水色のミニスカートに黄色の半そでシャツと少々派手な印象を鴛は受けた。だが、鴛は唐突な事に驚くと共に、即座に警戒心を強める。鴛は仮にも指名手配犯。警戒するのが当然だった。

「何の用だ？」

「お兄さん、これからどこ行くの？」

「どこでもいいだろ」

^{かじょう}
「香條市？」

鴛の目的地。この女性はきれいに言い当てた。鴛は黙ってそれに

頷く。

「なら一緒に行きましようよ。あたしもこれから香條市に向かうところだったしね。旅は道連れっていうでしょ？」

「確かにそうだが……名前くらいは教えろ」

あきもとはるか
「秋本遙よ。お兄さんは？」

あかきたける
「赤城猛だ。よろしくな秋本」

当然、鴛は偽名を使う。本名など言えるはずも無かった。しかし、気づかれていないところを見ると下手に出るよりはこのまま均衡を保つのが一番だろうと鴛は判断した。

「さ、乗って乗って」

「ああ」

ワゴン車は二人を乗せるとすぐさまエンジン音を駆り立て、その場から発進した。目指すは香條市。鴛の次なる目標物ターゲットが何なのか。それを知るのは鴛のみだ。

「へえー猛さんは色々な場所を巡ってるんだ」

「まあな。かれこれもう三年近くになる」

猛——否、鴛と遙はワゴン車の中で互いの話をしていた。勿論、鴛が旅をしているのは実を言うと半分は正解である。しかし、その旅路や目的は決して人には話せないものだ。

「いいなー旅かあ。あたしもしてみようかな」

「そんな気楽で楽天的じゃないぞ旅っていうのは。自分で色々調節しなきゃならない、お金のやり繰りや衣服の洗濯。コインランドリーなんてそうそう使えたら旅じゃないしな。まあしないよりはする方がいいと思うが」

「結局どつちな、猛さん……」

「まあ可愛い子には旅をさせろっていう事だ」

「っしやー！ あたし可愛い子なんだあー！」

鴛の言葉に車を運転しながら遙はガッツポーズを取る。鴛は正直一瞬驚いた。彼の常識のようなものを軽く破壊したような感じが見られる。しかし、追々聞いてみると遙は二十歳。つまり鴛とは五歳近く離れているから少しだけ時代が違うのだ。少し変わっていてもそれは仕方無い事だ。最も、最近「ボク」とか「オレ」とかが一人称の女子も少なくは無い。あくまで予備知識。

「まっ、旅をするなら気楽にやる事が大事だな。数日経って自宅戻りじゃそれは旅じゃないからな」

「分かってますって！ よしっ、早速今日家に帰ったら支度しようつとー！」

「あっさり決めるなよオイ……」

「即決行動があたしのモットーなんで！」

「そんなんでいいのかよ」

「まあまあいいんで——」

「おい、ハンドルッ！」

鴛が突然そう叫ぶ。遙が足元と正面に即座に視線を移すと、正面にはトラック。車線をはみ出していたのである。勿論遙もすぐにハンドルを一気に回して車を元の車線に戻した。一安心の息が漏れる。それは

当然、安堵の息だった。

「って、いくら何でも危ないだろ今のは！」

「ご、ごめんなさーい……。時々やっちゃうんですあたし」

大丈夫かコイツ。本気で一瞬そんな事を考える鴛だった。しかし、遙は事ある事に何かとやらかしている。といっても通算二回目だが、最も記念すべき第一回は発車の際の「出発進行ー！」で拳を突き上げた際に、ワゴン車の天井に拳を打って少し悶えていた。勿論この時鴛は馬鹿馬鹿しいと思っている。というよりは馬鹿だ、と思っていたのはここだけの話だ。

「……………大丈夫か本当に……………」

この不安がいつか現実のものになってしまうのでは、と思うと呆れるような気分になる鴛がいた。

「まあ、でも猛さんは熊とかに会った事無いんですか？ 山登りとかしてそんな体つきですけど」

「体つきで人を判断するな。まあ、登った事はあるが……………」

そう、つい先日。現に数時間前、鴛は山にいた。

「やっぱり当たってるじゃないですか！ で、熊に会いましたか？」
「熊なんて出るような山には入らん。猪に関してもだ。出来るだけ

安全な旅路を使っているから危険な場所にはなるべく入らない。なので会った事も無い」

「えーっ。ちよつとガツカリです」

「早々出てこられたって迷惑だけだな」

「まあ、そうですね」

遙は苦笑いでそう返す。鴛も少しだけ笑みを浮かべていた。詐称しているとは言え、今は善良な旅人のフリだ。笑える時には笑いたい。鴛の正直な気持ちでもあった。

「さ。着きましたよ香條市。鴛さんはこれからどこへ？」

「そうだな。適当にしばらくぶらつくと思う。まあ、またバツタリ会うかもしれないがその時は無視していてくれ。というか無視してくれ」

「どうしてですか？」

「大人の事情だ。また会えたらな遙。じゃあ」

そう言つと、鴛は遙に背を向けて別れを告げた。『大人の事情』

——そう、鴛にはやらなければならない事がある。その一步。ヒントを得るためにこの街へ足を踏み入れたのだ。市街地の影響だからか辺り一面ビルだらけ。とはいえ、鴛が以前仕事をしていた頃に毎日のように通っていたあの街はもっと経済的に大きかった。

「さあて……始めるかあ……」

鴛の目が一瞬にして変わる。狂気に満ち溢れ、威圧を放ち、その瞳はどこまでも奥底が見えないような感じだ。彼の目は本来、緑色なのだが、その目が黒を纏っていた。完全な黒でなければ、完全な緑でもない。黒と緑が混ざったようなそんな色。しかも目が充血していた。静かに鴛は手を黒のボトムスのポケットに入れる。そして

中からほんの僅かであつたが垣間見ることが出来る。それは我が国日本の陸上自衛隊が使用していると言われる9mm^{ミリ}拳銃。いや正式名称は――。

シグザウエル シグザウアー
SIGSAUER P220。

当然、通常の正攻法では手に入るはずの無い代物だ。

鴛はどこにでもあるような普通の家庭で幼少期を過ごした。小学校では元気いっぱいの子供、中学生では少し生意気になり、高校生では青春時代を友と一緒に走りぬけ、大学時代はアルバイトをしながら勉学に勤しんだ極々普通の――いや、極々普通というよりはある種現代の人間の理想像なのかもしれない。

そんな鴛も就職後に家庭を持ち、数ヶ月前には待望の子供が誕生した。しかし、事件はその矢先に起こった。連続放火魔の第一の被害者。それは、鴛の妻である陽子と子、雄太が放火魔の被害に遭い、そして死んだ。焼け跡から遺体は発見された。この時、鴛は県外に出張している最中だった。家族の死はその日の晩に電話で聞かされた。当然、鴛はすぐさま自分の居場所に戻った。

そして岸岡龍治と出会う。

「警視庁の岸岡龍治と言います。赤石鴛さんですね？」
「はい」

鴛の声はひどく落ち着いていた。しかし、その実体は少し揺るがせば全てを壊しきれるほどに脆かった。それは最初の応答でなんと

なく岸岡も判断できた。

「……一応アリバイをお尋ねしますが、犯行時刻は… ホテルへ戻られてましたよね？」

「ええ」

「貴方のアリバイはホテルのカメラが証明してますから安心してください。犯人は我々が必ず逮捕します！」

「……………」

これが初対面だった。そしてその僅か一カ月後。第二の事件が発生する。その時、鴛はある一つの電話を受け、犯行現場へと足を運んでいた。

「……………」

犯人から要求されたのは、『警察には言わず、一人で来い』ただそれだけだった。勿論、鴛はその要求を呑んだ。犯人を一回はいや、殺さなければ恨みは晴れない。これが鴛自身の感情。しかし、それを死んだ陽子と雄太が望んでいるとは思えなかった。でも、殴るくらいはしたかった。なのに――。

第二の事件に巻き込まれた。それも、鴛が呼び出しを受けた場所から数分歩けば行ける公園だった。そして、警察に連れて行かれた。第二の事件では鴛にアリバイなどない。鴛の不可解な行動は明らかに警察に不信感を募らせる。しかし、そこまで重要視もされなかった。しかし、犯人があの時近くにいた事は明らかに明白。鴛自身、犯人からの挑戦を無謀に受け続けた。そして、それと同時に被害者も増えていく。最初の事件から1年だけで鴛の周りで十人以上の人間が殺された。

そして、最初の事件以外、鴛は常に犯行現場の近辺にいる。更に鴛は自分から犯人の事を警察には告発しなかった。鴛の周囲の人間

はやがて鴛を責めるようになっていった。鴛の周囲でのみ人が死んでいく。鴛から距離を——いや、関係そのものを切る人間が殆どだった。

「鴛、お前何をしているんだ？」

ある日。最初の事件発生から一年半近くが経過した頃合いだっただろう——岸岡が鴛に聞いた。

「……………さあ」

「『さあ』ってお前、答えになってねえぞ」

「知りませんよ」

「……………まあいいさ。しかし、何でお前の周囲の人間が死んでいくのか……………鴛、誰かに恨みを買ったか？」

「いいえ、無いです」

鴛の声ははつきりとしていた。岸岡ら警察の捜査でも鴛は誰かに恨みを買われるような人間ではない。尚更、理由が分からなかった。

「ならいい。って聞くだけ野暮だったな。一年半もこうして付き合ってるのに今更こんな質問ってのも」

「そっぴやもう……………一年半ですか」

鴛の声のトーンが下がる。陽子や雄太が死んで、もう一年以上が経過した。しかし、やっと一年半という見方も出来た。

「……………鴛、お前実は犯人でした……………って事は無いよな」

それは突然だった。岸岡が小さな声で呟くようにそう言ったのである。

「有り得ませんよ……………」

鴛は少しだけ間を空け、更に続けてこう言った。

「——絶対に」

しかし、警察というのは非情だった。最終的に鴛は——犯人にされたのだから。身勝手な考えが原因で。

とはいえど、鴛にも非はあるだろう。早く警察に犯人の事を告げていれば被害者は拡大せずに済んだかもしれないのだから。

鴛は今の環境から、そんな事をふと思い描いたことは幾度もあった。

「本当にこれで全部吐いたのか？」

あれから一時間ほどが経過し、鴛は先程の銃——
SIG SAUER

シグザウエル シグザウアー

今の鴛が明らかに口にすべきではない言葉を鴛は静かに口にする。男は既に息絶えていた。ふう、と軽く深呼吸して息を整える。流石に人を『殺した』のだから鴛とて少し戸惑いがある。しかし、既に殺してしまったという後悔の念は無い。何せ、知っていたのに知らないフリをしたのだ。被害者側からすれば怒りが込みあがるのも当然である。鴛なりの制裁だった。

しばらくして、鴛は香條市を去る支度を始めていた。用が済めばもうこの街に用は無い。だが、気になっていたのは一つの事だった。それは今まで彼が制裁を加えた全員が皆揃って同じ事しか言わないのだ。変な格好をしたヤツが犯人——そんな事はもう聞き飽きていた。この香條市はいい潜伏場所がなさそうだったので今晚にでも引き上げるのが吉になるな——鴛がそんな事を考えた時だった。突如として震える携帯電話。その画面に映る十一桁の数字。それには見覚えがある。鴛はすぐさま電話の発信ボタンを押した。

「久々だね。元気にしてたかな？ 赤石鴛くん？」

声には無機質な音が混ざっていた。男女などの区別がつかないところから変声機を使っているのだろう。

「ああ元気だったよ。久々じゃねえか」

鴛の声はどこか怒りに満ちていた。最後の電話からかなりの時間が流れて突然の電話だ。怒りもするだろう。最も、別の方向での怒りなのだが。

「私を捕まえよう——いや、殺そうと動いているらしいね。無駄

な事しかないものだ君も……」

「無駄かどうかなんざ近々思い知らせてやるよ」

「まあ、私が変わった格好をしている程度の情報しか得れていない君には永久に不可能だと思っけどね」

「……………」

「楽しみにしているよ、私の前に君が現れるその瞬間をね」

その言葉と共に通話は一方的に切られる。ブツツという機械音と共に通話の切れた音だけが静かに鳴り響く。

「……………はつ。殺してやるに決まってるだろ……………そのために俺は生きてるんだからな」

鴛は誰にも聞かれないような小さな声でそう呟いた。その時だった。

「猛さんみーっけ！」

「うおっ！」

突然背後から不意を突かれるようにハグされる鴛。鴛はすぐさま、背後に背を向け、ハグした張本人を見ると――

「お、お前か遙……………」

ほんの数時間前まで一緒にいた秋本遙が彼の目に入る。はあ、とため息をつく。鴛は左手で自身の髪を軽く巻く。そして遙にこう聞いた。

「あのさあ、街で見ても無視してくれって言ったよな？」

「すいません、聞いてなかったです」

「聞けよ人の話くらい……」

「ところで猛さん何してたんですか？」

「ん？ ああ。軽く街を見て回ったからそろそろ出発しようと思っ
て」

「次はどこに行くんですか？」

「さあな。当ての無い旅だ」

「ならあたしも行かせてください！ 車での移動のほうで絶対に早
いですから！」

「い、いやそれはな……」

「駄目ですか？」

遙の懇願する顔はとても可愛らしく、ほとんどの男をその顔で撃
墜してしまうかのような涙目うるうるの顔だった。いや、寧ろこれ
で駄目だ、と言い切った方がおかしい、と言われてしまうくらい
の――。

勿論、鴛もその例外ではなく。

「……分かったよ。車の方はよろしく頼む」

「やったあー！」

無邪気に拳を上突き上げて喜ぶ遙。しかし、こういった部分を見
ると先程のあの行動が演技に見えて仕方なかった。

「で、次はどこに行きます？」

「しばらくは車の中でのんびりと旅だな」

「りょーかいしましたッ！」

なぜか敬礼して鴛の指示に従う遙。しかし、それは反面鴛のこ
とを信じているからだろ。鴛もそこまで悪い気はしなかった。

数日後。

鴛は香條市を結局その日の内に後にした。当然、香條市を訪れた際に乗った同じワゴン車に乗っている。鴛の横には鼻歌交じりで運転する遙。

「そういえば猛さんはあまり外に出ませんね？」

「ん？ …… ああ。人見知りだからな」

「あたしがこんな性格で助かりました？」

「…………… 一応は。あまり買出しなんていけないからな」

現実にごく数日は今までとは違い、久々に庶民的な食事を朝昼晩と楽しんだ。そして、その晩。車はある小さな田舎町に停車していた。既に鴛と遙は寝付いている。いや、鴛は少なくとも寝付いていなかった。ここ数日は銃すら出してない。銃を取り出し、軽くメンテナンスを行う。いざという時の護身用でもあった。そして再び震える携帯電話。

「もしもし」

鴛はいつもの口調で応対する。しかし、その相手からすれば軽いような口調ではない。敵と認識したような口調に感じた。

「やあこんばんは。鴛くん。元気にしているみたいだね」

電話の相手はやはりヤツだった。鴛の最大の敵というべき人物。

「こんな夜遅くに何の用だ」

「いや。君こそこんな夜遅くに移動中かい？」

「ああ」

即答だった。そして犯人はこう語る。

「君は私を殺したいのかい？ 所詮憎しみや復讐に終わりは無い。作られるのは新しい連鎖だけだ。それでもかい？」

「少なくともお前は殺さないと俺の中の怒りの炎は収まらねえよ。」

第一、俺の中の正義はそれだ」

「悪意の間違いじゃないのかい？」

「何？」

鴛は犯人からの突然の言葉に一瞬驚くような声で返した。犯人は続ける。

「結局人間ってのはそんなものさ。戦争なんて最高の例だよ。当人達はそれを正義と思い、傍から見ればそれは悪に過ぎないなんてね。戦争をしていれば邪魔なものは悪にしか感じない。現代だってそうだろう？」

「つまり、どういう事だ？」

鴛の声は怒りが混じっていた。犯人はそんな事を知っていてさらに容赦なく続ける。

「所詮君も悪だ。私も悪。だってそうだろう？ 目撃者とはいえ、無関係な人間を何人も君は既に殺している。私だってそうだ。でも、君や私はそれを正義と思い込んでいるからねえ。人間の深層心理って恐ろしいもんだよ、我ながら」
「……………」

鴛は何も答えない。

「まあ、いい。さて本題に移ろう」

長々しい前ぶり。

犯人は更に続けてこう言った。

「もう面倒だ。この前は長々しく待とうと思っていたけれど、やっぱりやめだ。長々しいこの争いに終止符を打たないかい？」

「つまり、どういう事だ？」

「簡単だよ。『決着を着けよう』そう言っているのさ」

「……………」
「どういう風の吹き回しだよ」

「いいじゃないか。私がただ単に疲れたんだよ。君に殺されてもいい。そう思っただけだ」

「何？」

「だが私とて殺されるつもりは毛頭ない。君を正面から迎え撃って正面から殺す。どうだい？ フェアだろう？」

「つまりは決闘か」

「簡単に要約するとそうなるね」

乗り気だった。どうせ犯人と出くわせば何かが起こる。それは確かだった。そんな鴛の心情を見透かしたように犯人は続ける。

「そう言えば今君はどこにいるんだい？」

「……××町だ」

「××町か。なるほどね。なら場所は町の中にある廃墟の塔。町にいればどこからでも見えるから場所は分かるだろう？ 人も近くには住んでいないし、人気も無い。そうだな、深夜一時に落ち合おう」
「上等だ。急すぎるが……。まあいい。お前を殺せるんだったら時間や場所なんざ関係ねえよ」

いつもなら犯人からの電話を鴛はその時、自分から切断した。そして携帯をポケットに戻すとすぐさま銃の弾数を確認する。そしてすぐさま車に引き返し、予備の弾もポケットに仕舞いこんだ。全ての準備を整えると、鴛は車を出て、廃墟へと歩む。その前に遙の寝顔を覗き込んだ。

「…………じゃあな。さよなら」

軽く、ほんの小さく鴛は微笑むと遙のワゴン車を後にする。遙の寝顔。冗談抜きで可愛かった。鴛の本心である。

そして、鴛は——赤石鴛は向かうのだった。最後の大勝負の場所へ。

深夜一時。廃墟の塔と言われた場所は何かのビルだった。しかし、人気は本当に無い。扉は開けられている。鴛は迷わず中に入った。廃墟の中は文字通りに廃墟のようで、とても静かである。しかし、人気をどこかで感じていた。大方例の犯人だろう。すぐに予想はついた。

進んでいくとやがて、扉がいくつか姿を現した。扉がある場所は蹴りで開け、注意深く警戒しながら廃墟の中を進んでいく。

そして、最上階に程遠くないある一室の扉を開ける。鴛の眼中に飛び込んできたのは静かにゆれるチェア。鴛は銃を構えた。そして、静かに歩み寄る。

「やっと見つけたぜ。この野郎……」

「やあ、やっと来たかい。全ての部屋を調べていたら……まあ時間はかかるだろうね」

犯人の声は相変わらず無機質だった。まだ変声しているらしい。

「くたばってもらう。お前は死んで罪を償え」

鴛はその言葉を言い切る前に銃の引き金を何回も引いた。それと共に何発も銃から弾が飛び出す。それがチェアを貫通する。何発撃ったかは分からない——だが、これでヤツも確実に死んだ。息が荒れる。何発も連続で撃った事は全く無かった。

「ケツ……。ざまあみやがれ……。なあにが『殺す』だ。逆に殺されてるじゃねえか。何もせず……」

「そうだね。殺されるのは君の方だよ。鴛くん」

「——！」

響いた声は背後から。鴛はすぐさま背後を向くと共に距離を置く。

鴛の視界に入ってきたのは全くもつての新参者。

身長は鴛よりも少し高く、黒のコートに全身を隠し、顔には白の面を被っている。その全てが異質そのものだった。同時に今まで鴛が殺してきた者達が皆揃って言っていた言葉の真の意味もようやく理解した。

——これは変だ。いや、変というレベルではなく、異質。見えざる威圧感。見えざる表情の裏には何が見えているのか。鴛も一瞬臆してしまう程であつた。

やがて、彼が彼女が分からない敵はこう口にした。

「初めまして鴛くん。どうだったかな？ 私の最初の接待は？」

「この上なく最悪だよ。まあ、これから本物を殺^やれるんだからこの上なく最高、と言っておこうかな」

「そうかい。喜んでもらえて何よりだ。しかし、君の銃——SIG
シグザウアー
SAUER P220の装填弾数はどんなに詰めても九発までだ。そして君は既にその全てを先程撃ち尽くした。私は言つたはずだ。正面から君を迎え撃つて殺す——と。警戒心が足りないな、鴛くん」

それと共に敵——犯人が懷から一つの銃を取り出す。銃の全体が銀色に輝き、グリップの一部が黒。そして銃の一部には茶色のようなラインが描かれている。鴛はそれが何かを知っていた。

「『デザートイーグル』……。自動拳銃で世界最高の威力を持つつて言われてる銃がよ……」

「そう、君の——鴛くんの持っているSIG SAUER P220よりもデザートイーグル（こいつ）の方が威力は上だ。とはいえ、使い手によっては何の価値にもならないようなただの鉄くずに変貌するけどね……」

犯人はそう言う。どこか勝ち誇つたような口使いだった。当然と

いえば当然である。既に鴛の拳銃——SIG SAUER P220は現在、装填弾数がゼロ。対するデザートイーグルには当然弾が入っているだろう。本人が鴛を殺す——そう宣言しているのだから。

「意外とあっけなかったねえ、鴛くん。君の人生も今日で終わりだよ」

「俺はまだ終わってねえ。死んでねえじゃねえか」

「そうだね。まだ君は死んでいない。でも、これから君は死ぬ。私の中の正義の炎、悪意の炎。両者が君を殺せと指示している。だから——死んでもらう」

「だったら俺だって全力でお前を殺す。それが俺の悪意と善意、両者が導き出した答えって事になるんだからな」

「そうなるね」

勝負は始まった。とは言えど、鴛が圧倒的に不利なのは分かっている。今、二人がいる部屋には鴛や犯人が入ってきた扉以外にもう一箇所、チェアのあった場所から右手に扉がある。鴛にとってはそこに逃げ込む事がまず何よりも第一だった。しかし、それも犯人は理解しきっている。

鴛の両足が部屋の中を縦横無尽に支配する。しかし、デザートイーグルの弾の方が圧倒的に鴛より速い。犯人はただ、デザートイーグルを撃つだけだ。弾数が無くなってもすぐに補給されてしまう。その速度は一瞬に近かった。犯人が銃撃手として相当な腕を持つている事は明らかである。だが、鴛にとっては疑問が走った。確実に自分を撃ち抜く事は出来るはずだ。なのに、何故殺そうとしないのか——、撃ち抜こうとしないのか。不思議だった。しかし、その疑問がもたらしたいい結果もある。何とか銃撃の雨を切り抜けて、鴛は扉から外に出る。しかし、その扉の内側から弾が一発貫通した。装填して迎え撃とうと思っていた鴛は一瞬ぎよっとする。

よくよく思えばこの廃墟はすでに誰にも使われず、整備もされて

いない場所だ。錆びていれば、当然の如く簡単に貫通する。とにかく鴛はすぐとなりにあった非常階段を上り始める。下行きは無かった。どうやらこの部屋と上を直結させる非常階段らしい。

「……ふん、それで私から逃げられると思うのかい鴛くん？」

それと共にデザートイーグルから一つの銃弾が鴛を捉える。その捉えた場所は心臓ではない。頭でもない。目や手、顔などでもない。足だった。

「ぐあああああああああつ！！」

鴛が悶える。苦悶の表情が鴛から零れる。しかし、鴛は激痛に鞭を打ち、ひたすら上る。下からは敵が——犯人が迫っていた。退路は無い。犯人はそれでも追い討ちをかけるように撃ち続ける。しかし、鴛本人ではなく鴛の上る階段をしつこく狙っていた。まるで鬼ごっこをしているかのように逃げる逃げろ、と銃撃が告げていた。一方で鴛の体は重たくなり始めていた。何せ足を狙われたのだ。足取りは重くなるし、当然出血は相当な量である。顔色も少しずつ悪くなる一方だった。

鴛をあざ笑うかのように追う犯人。いつでも自分は鴛を殺せる——余裕だけが犯人にはある。

「階段の終着点は綺麗なまでに死の世界の入り口だったね。鴛くん」

「はあ……………はあ……………はあ……………」

鴛と犯人が非常階段を使ってたどり着いた場所。それはよりによって屋上だった。夜空がまだ輝いている。犯人はデザートイーグルを構えた。

「さてそろそろおしまいにしようか。フェンスによじ登ろうたって無駄だよ。その前に君は死ぬ」

「だろうな。フェンスなんざ使う意味が無い」

「なんだ、自覚しているじゃないか」

「お前の銃撃のテクニクは俺より遥かに上だ。正直俺にはもう勝ち目がねえ」

「…………死ぬ覚悟は出来たみたいだね」

犯人がデザートイーグルの引き金を引こうとしたその時――。

シゲザウエル シゲザウアー

先に鴛のSIGSAUER P220が犯人の顔を捉えた。犯人も突然の一撃に体が仰け反る。

「…………ぐ…………貴様…………！」

「お前が馬鹿みたいに連射してくれた音のおかげで装填がギリギリ終わった。感謝するぜ」

「なるほど…………。お前を甘く見ていたみたいだね…………」

その時だった。犯人の顔に被ってあった面にヒビが入ったのである。ピキ、という音は無音であったこの空間にとてもよく響いた。

「やっとお前の姿を拝めそうだな……………」

「ちい、よりによって面が壊れるなんて…………。少しは銃弾対策をしていたけどまさか一発で壊されるなんて…………！」

その声は段々無機質な音から別の声に変わっていく。そして、面

が壊れ、それが地に落ちた時。 鴛は犯人の正体を遂にその目に捉えた。

「は、遙………！」
「どうも、猛さん。いえ、赤石鴛」

犯人の正体——それは鴛と旅をごく僅かではあったが共にしていた人物。秋本遙。当然、突然突きつけられた現実に鴛も流石に動揺を隠しきれない。

「お前、ここで何をしてるんだよ？」

「さあね。……バレた以上はしょうがない。邪魔な装備は剥がさせてもらうわ」

遙はそう言うと、全身を覆っていた黒のコートを脱ぎ捨てる。すると、遙の姿が露になった。初めて会った時と全く同じ服装。しかし、遙はハイヒールを履いていた。かかと部分がとても高い、異常なハイヒールであったが。しかし、それもあっさりと破棄してしまう。そしていつもと同じような、サンダルを身に着けた。

「驚いた？」

遙はそう言った。鴛は未だにパニック状態だ。

「……………な、なあ。何かの冗談だろ？ 遙」

「冗談じゃないわ。あんたの家族、友人全て殺したのはこの『私』。秋本遙よ」

「……………何故」

鴛は怪訝な表情で遙に聞く。

「そうね。確かに気にはなるわよね」

「何が理由なんだよ？ 俺がお前に何かしたのか？」

「してないわよ」

「じゃあ何だ！」

鴛の言葉に遙はこう返した。間を置いて。

「あんたが壊しやすかったから」

「……………な」

「あんたが壊しやすかったからよ。あんたを初めて街中で見た時、あんたが壊しやすいと判断したから。全てを奪った人間がどんな運命をたどるのかをちよつと見てみたかったから」

「そ、そんな理由で俺の家族や友達やお世話になった人達。殺しまくったのかよ！」

「そうよ」

鴛の言葉に遙は即答でそう返した。

「正直言つと、あんたに私は恨みなんて何一つも無いわ。ただ単に興味があつたからその興味を実行に移しただけよ」

「デメエ……………」

何かが——綺麗に切れる瞬間だった。プツリと糸が切れるようなそんなものではない。思い切り、引き千切られたような、そんな感覚。

「デメエは死なないとバカが直らねえみてえだな！」

「そうね。あんたに——あんた如きに私が止められるとは思えないけど」

「絶対にブツ殺す。俺が——オレが殺してやるよ、遙」

鴛の目つきが変わった。黒と緑の混ざったような色。しかし、今

回は違った。黒単色。迷いが完全に――消えた瞬間だった。

「……殺せるモンなら殺して見なさい」

遙はその言葉と共にデザートイーグルの銃口を鴛の左胸――心臓へ向ける。

「心臓をぶち抜くってか。ならオレもテメエの心臓をぶち抜かせてもらうぜ」

「やってごらんなさい」

「テメエこそなあ……」

次の瞬間、両者の銃声が鳴り響いた。両者共に銃撃の衝撃で地に倒れる。しかし、明らかな違いがあった。

遙からは血が流れ落ちているのに関わらず、鴛からは血が流れ落ちていなかった。しかし、鴛も心臓を狙われている。生き残った理由は簡単だった。

「テメエ、何で防弾チョッキ着てねえんだよ。心臓部位くらいは着けてろよ。テメエ程の銃撃手なら当然の常識だろうがよ」

「……………げぼっ！」

遙の口から血が吐かれる。鴛が見下すように遙を見下ろした。

「なんでお前、俺の全てを奪おうとしたんだよ……………」

「し、知らない……………。私は全てを壊された、でも……………それを受け入れたくなかった。私以外に破壊され尽くした者全てが……………見たかった。家族だって……………私は消した。全て……………壊したかったから」

「家族まで殺したのかよ、お前……………」

「『秋原千夏』。それが私の本当の……名前……」

「秋原……。以前してたな……。一家殺人事件。よりによってお前が……」

「フフフ……。なぜかは分からないけど……。私、何故だかあんたの事……。好きになり始めてた……」

「でも無理だ。俺は好きになれない」
「でしょうね……」

その言葉と共に、遙は静かに——瞼を閉じた。息も止まる。鴛はこう言った。

「全てを奪ったんだ。全てを奪われた者が好きになるはずがねえよ」
「鴛！」

その言葉と共に駆け上がってきた人間——岸岡龍治。そして、惨状を見てこう言った。

「お前、まさか……」
「捕まえるなら捕まえなよ。俺は捕まる気は無い。どうしても捕まえたいなら……オレを殺しても捕まえな」

その言葉を言った瞬間、鴛の意識は飛んだ。銃弾が彼の各部位を撃ち抜いた。足、手、腹。出血量は明らかに即死級だった。

「……お前、死ぬ前によく知ったのかよ。いくらなんでも遅すぎだ……」

そう告げる岸岡の見た鴛の表情はとても満足げな表情であった。

復讐が残すもの。それは血で塗られた争いだけ。血は血を呼び寄せ、その運命に終わりなど有り得ない。

赤石鴛はそれを死の直前——引いては、秋本遙の死とともにその事に気づいたのである。

そして、鴛は復讐を達したその瞬間。どんな事を思っていたのか——それを知る者は誰一人としていない。

（後書き）

この小説の反省点。

- ・ストーリー展開が急すぎる（特に終盤へのスパートは）
- ・終盤滅茶苦茶
- ・心理表現の少なさ。

うん、自分でも執筆していてちょっと不思議に感じた作品でした。オリジナルとはいえど、バッドエンドものを書いたことが一度も無かったのです。

そもそもこの小説は自分の学校の文芸部の文芸誌に掲載する小説でもあります。まあ、一種の先行公開です。

自分としても色々課題点がある一方でこの小説はもっと膨らませる事が出来そうな作品でもありました。もしかしたらまたリメイクして書く事もあるかもしれません。

最後に。ここまで見てくださった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678o/>

二つの炎

2010年10月9日08時01分発行